

「鬼」とシヤーマニズム

——カロリン諸島と日本の比較のために——

小松 和彦

一 はじめに

駒沢大学は、ただいま司会の先生に紹介していただいたとおり、大阪大学に転勤する前の二年間ほど、非常勤講師として通っていた思い出深いところでした。今日も、その時のように、地下鉄を降りてから裏道を通ってここまでやって来ましたが、ずいぶん風景が変わっているのに驚かされました。実は、駒沢大学にはもうひとつ忘れがたい思い出があります。十数年前になります、ここで日本民俗学会の研究大会が開かれたとき、私にとって初めての学会発表をしたのですが、その時、二〇分の予定のところを四〇分近くも喋ってひんしゆくを買った覚えがあります。話題は高知県のいざなぎ流の祭儀についてでした。この学会で、第十回渋沢賞を受けました。これも今では遠い昔のことになってしまったようです。

先輩の佐々木宏幹先生からの依頼で、こうした思い出深い駒沢大学で講演をさせていただくというので、

皆さんに少しでも役に立つような話をしたいと思っていたのですが、今年（一九九一年）の八月からミクロネシアに調査に出かけていて、つい最近戻ってきたばかりのため、とてものんびりしているミクロネシアでの生活から日本の生活への切替えがまだ十分にできていません。そんなわけで、はたして皆さんの研究の役に立つような話ができるか心もとない状態ですが、ミクロネシアでの調査をも踏まえて、今日は、佐々木先生を初めとしてシャーマニズムの研究者も多く集まっていることですので、「『鬼』とシャーマニズム」と題した話をさせていただくことにします。ここでは、人類学的に言えば「悪霊」に当たる語として、日本の民俗語ないし土着の語の「鬼」を使っていますのでご承知いただきたいと思えます。

二 ミクロネシア・ポンナップ環礁のシャーマニズム

ミクロネシア地域は、現在はいくつかの国に分かれています。私が調査しているのはミクロネシア連邦で、その内のトラック州です。地理的にはカロリン諸島に属します。日本から飛行機で南下していきますと、観光地で有名なサイパン島やグアム島があります。そこで飛行機を乗り換え、約一時間半ほどで、トラック州の州都のあるモエン島に到着します。ここが私の調査のベースキャンプです。トラック島という名称が広く日本や世界に流通していますが、最近、ミクロネシア連邦ではこの名称を廃止して、現地の発音に即した「チューク」という名称を公式的には用いるようになりました。このチュークという語は「山」を意味しています。トラック州の州都のモエン島を含むトラック・ラグーンは、大昔の火山の火口にあたっているため、隆起珊瑚礁でできた、平坦な小さなファヌーピイ（砂の島）と呼ばれる島とは違った、起伏のある地形の島々から構成されています。私の調査地のポンナップは、後者のファヌーピイと呼ばれる島で、東京から名

古屋ほども離れているトラック・ラグーンの外にある周囲約四キロメートルの小さな島です。ポンナップについても、アメリカ人はプラップ (Pulap) と呼んでいます。島民の発音はポンナップないしはポンナップ (トラック地域では l 音と n 音の区別がはっきりしない) が正しいようです。私はこの島でポンナップと発音していましたが、変な発音だと言われませんでしたので、以前からポンナップと記述しています。プラップとかポンナップなどと記述している地図や論文もありますが、それはこの島のことです。

ポンナップは、人口が島外にいる人も含めて約七〇〇人です。このため古老も少なく、しかも一九四七年に、島をあげてカトリックに改宗してしまったために、それ以前の伝統的な宗教生活を体験・記憶している人が少なく、シャーマニズムについて調査しようとしてもなかなか情報を得ることができませんでした。カトリックの宣教師による改宗は相当暴力的になされたらしく、いろいろな逸話が語り伝えられています。改宗した動機のひとつに、もし改宗しなければ宣教師を運んできたアメリカの海軍に殺されると思ったことがあげられていました。宣教師たちはポンナップの伝統宗教を徹底的に破壊し、日常生活に対してもキリスト教の理念にそった生活への変更を厳しく課しました。恋愛観や結婚観も変えられてしまいましたし、それにそぐわない伝統的な恋愛を歌った踊りも禁止され、彼らにカヌーの技術や呪術を伝えたときされる文化英雄神たちの神社も跡形もなく破棄されてしまいました。

ポンナップの一九四七年以前の生活と文化を復元するのが私の調査の主要な課題で、古老たちから幼かった頃の改宗以前の生活を思い出してもらったり、改宗以前から語られていた伝説や昔話を語ってもらい、そこに描き込まれた習俗・習慣から昔の生活を思い出してもらったりすることで、そうした復元作業を行ってきました。ところが、興味深いことに、そして幸いなことに、伝統的宗教儀礼は捨てたのですが、たくさん

の神話的伝承や昔話は語り継がれていました。島民の改宗以前の伝承の記憶までも抹殺することは宣教師にもできなかったわけです。成人儀礼や葬式などの様子を詳しく語り込んでいた昔話を採集したこともありま
すし、オロファットと呼ばれるトリックスター説話もいくつか採集できました。こうした説話についてはそ
のうち機会を見つけてまとめて発表するつもりです。これまでの調査では、この島で「ワーンヤニュー」と
呼ばれるシャーマンをはっきり語り込んだ説話を見つけ出すことができなかったのですが、幸いにも、今回
の調査でかなり具体的な内容を伝える伝承を採集することができました。

ワーンヤニューという語は、「カヌー」を意味する「ワー」と「神」を意味する「ヤニュー」の合成語で、
「神の乗り物」といった意味の語になると思います。ワーンヤニューは、この言葉からもわかるとおり、神
が乗り移る宗教的専門家のことで、憑霊型のシャーマンに当たります。幼い頃の記憶をたどって古老が語っ
てくれたところによりますと、ワーンヤニューは普通の人とは違って、そばを通ったとき、いつも荒い息を
していたとか、突然大きな奇声を発したとか、「ホーマ（妖怪、幽霊）が来る、ホーマがどこそこに来てい
る」と周囲の人に警告したり、病気になるた人のところにいったってホーマよけの呪文を唱えたり呪薬を施した
りしていたといえます。では、ワーンヤニューにはどのような神が乗り移ったのでしょうか。いろいろの神
が乗り移ったらしいのですが、私の聞いた範囲では、亡くなった自分の父や母、夫や妻、子供など近い親族
が乗り移って託宣することが多いようです。

ところで、ワーンヤニューという語は「神がかかる」状態を意識し強調したときの用語で、別のコンテキス
トでは「ホウヨーンゴル」とも呼ばれます。「ホウ」は「人」、「ヨ」は「探す」、「ンゴル」は「靈魂」を
意味しますので、「魂を捜する人」という意味になります。実際の生活のなかでシャーマンがどのような活

動をしていたのかは、このハウヨンゴルをめぐる伝承から浮かび上がってきました。

三 ポンナップの呪医と病気観

ポンナップでは、島の土地は大きく「里」（モホール）と「森」（レワル）に分けられます。タロ芋の畑も「森」に属します。今回の調査で、島の地名にまつわる伝承を集めていたところ、「森」が妖怪たちの出没する恐ろしい空間としての性格を帯びていることがわかってきました。以下の話は、その一例として語られたもので、実話として語られました。

ドイツ時代から日本時代にかけての人に、島の首長にもなったイケラムという名の男がいた。彼はワーンヤニューでありハウヨンゴルであった。ある日の夕方、タロ芋の畑で仕事をしていたイケラムの妻が、タロ芋の葉の陰に変なものが横切ったのを見たら、急に気分が悪くなったので仕事をささと切り上げて家に戻ったが、その日から重たい病気になった。そこでイケラムが占ったところ、神がかって、妻が見たものはホーマでそのホーマが妻の魂を食べてしまったので病気になっているということがわかった。さて、私たちが知りたい神がかったときの様子ですが、いわゆるトランスの状態は起きずに、誰かとぶつぶつと話し合っているように見えたといった程度の神がかりで、話し相手は、つまり憑依した霊は、若くして死んだイケラムの息子の霊だったそうです。そこでイケラムはヤシの殻に呪薬を入れ、ホーマが出た畑に出かけ、タロ芋の葉の陰に隠れていると、同じ場所にホーマが現れたので、そのホーマの後ろに回って首を捕まえ、思いきり締め上げて、食べられてしまった妻の魂を吐き出させた。そしてそのホーマを持っていった呪薬の入ったヤシの殻のなかに封じ込めてしまった。吐き出された妻の魂が病気の体に再び呼び戻されたので、だんだん

病氣も良くなり、ほどなくして元気になった。このような事件があったので、妻の名前をもととはウイレムといたのですが、「ハウレン」つまり「天にあがった人」という名前に改名したという。

この事例は、多くのことを語っていますが、シャーマニズムの観点からみますと、この島では、ある種の病氣はホーマによって魂が奪い去られ食べられてしまうために生じ、シャーマンはその奪われた魂をホーマと戦って奪い返して来る宗教者だということがわかります。つまりワーンヤニューとかハウヨンゴルとか呼ばれる宗教者は、「占い師」であり、「呪医」であるということもできるわけです。

四 ポンナップの「片側人間」(片側神霊)

ところで、昔話のなかにはワーンヤニューとかハウヨンゴルだという形では登場しないのですが、実生活のなかのワーンヤニューとかハウヨンゴルとか呼ばれる人物に相当する者として、「ヤニューヤラマ」という存在が考えられています。ワーンヤニューやハウヨンゴルのことを、ポンナップの人たちはヤニューヤラマみたいな人である、と説明したりすることからもそのことがわかります。「ヤニュー」は「神」(ホーマのような悪い霊も含む)、「ヤラマ」は「人間」という意味ですので、「神であり人間である者」、つまり「半人半神」的の属性を持った存在を意味しています。さらに興味深いことに、このヤニューヤラマの姿かたちは、体の右半分が人間で左半分が神(妖怪)の姿をしている、と説明されます。ヤニューヤラマとは神と人間の間・境界に位置する存在、神であり人間である存在なのです。ヤニューヤラマは人間界にいるときは人間の姿をしていて、神の世界にいるときには神の姿をしているとされ、そのときの状況に応じて人間の側にたって行動したり、神の側にたって行動したりするといえます。昔話に登場するヤニューヤラマ

の多くは、神の世界のなかでも、良い神ではなく、悪い神（ホーマ）たちに混じっていたり、ホーマが出没する森や無人島に住んでいると語られることが多いようです。人間の世界に住んでいる場合には、人里の周辺部の一軒家とか大きなパンの木の穴などに住んでいると語られます。ワーンヤニュー（ホウヨンゴル）に対応するヤニューヤラマは、人間界に住んでいる場合のヤニューヤラマで、たとえば、こんな昔話があります。

村のはずれのパンの木の穴に、ヤニューヤラマが住んでいた。ホーマがねらいをつけた人間を捕まえて食べようと追いかけてきた。気づいた人間が一生懸命逃げ、もう少して捕まりそうになったとき、大きな木の枝をくぐったところ、その枝にホーマがぶつかって痛がっているすきに、遠くに逃げたがさらに追ってきた。また捕まりそうになったが、今度は大きな木の根が地面から出ていたのでそれを飛び越えて逃げたところ、ホーマはその根につまずいてひっくり返ったので、そのすきに遠くに逃げた。こうして村はずれまでようやくたどり着いてヤニューヤラマの住む木の前まで来た。いち早くそれに気づいたヤニューヤラマは、逃げ帰った者を穴に招き入れ待っていると、ホーマがやって来た。ホーマが穴に首を差し込んで来たので、その首をひっつかまえ締め上げたところ、ホーマは悲鳴を上げて降参した。見るとそのホーマは女のホーマだったので、「おれの妻になれ。なれば命は取らない」といって妻にしてみました。

少し話が脇にそれますが、日本の昔話にも、体の半分が鬼でもう片方の半分が人間であるという、ポ>NNPPのヤニューヤラマにそっくりな存在を描いた話があります。それは「鬼の子小綱」と呼ぶ昔話群です。鬼にさらわれてその妻になった人間の女が、鬼の子を生む。娘（もしくは妻）をさらわれた父（もしくは夫）が、娘をあちこちを捜し歩き、ある山奥で、体の半分が鬼で半分が人間のかっこうをした子供に出会う。捜

していた娘が生んだ子供であるとわかり、娘のところに案内してもらおう。三人は鬼の留守を見計らって逃げ出すが、気づいた鬼が追って来る。舟に乗って川を渡っていたときに、鬼が川に来て川の水を飲みだしたので、舟が鬼の方に戻り始めた。そのとき、鬼の子が母に「陰部を露出させて、そこを叩け」と教え、その通りにすると、鬼が笑いだし、飲み込んだ水を一気に吐き出したので、舟がたちまち反対の岸に着き助かる、という内容の話です。

この話の鬼の子は「片子」とか「片角子」「片」などと呼ばれています。この話では、そのような子は人間と鬼の婚姻の結果生まれたために、双方の属性を半分ずつ継承したわけですが、ヤニューヤラマについては、どうしてそのような姿かたちをとることになったのかを説いた伝承はありません。しかし、ホーマを退治する一方では、ホーマと結婚するという属性は、注目してよいでしょう。

五 日本のシャーマニズムと悪霊祓い

さて、ここで、話をもう少し一般的なレベルに移して、ポンナップのシャーマニズムを考えてみたいと思います。ポンナップのシャーマニズムは、トランスを伴わないことが多いようですが、神が乗り移るという点では憑霊型ですが、病人の魂がホーマに奪い取られる病気になるという点では脱魂型の特徴を示しております。イケラムはその妻の魂を奪い返すためにタロ芋の畑に出かけたと言われていますが、実際にそうしたのか、肉体は家にあって彼の魂だけを畑に飛ばしたのかははっきりしませんが、その病気治療には脱魂型のシャーマニズムの特徴をうかがうことができます。

日本のシャーマニズムは憑霊型だとされています。確かにそうだと思います。宗教者自身や彼らが用意し

た「よりました」（霊媒）に神霊が乗り移り託宣をしている例は枚挙のいとまがないほどです。しかし、神がかるだけでは病気を引き起こしている悪霊を退治することはできません。ポンナップのワーンヤニューがホウヨンゴルでもあったように、日本の宗教者の多くが、自分自身であるいはその分身を用いて、悪霊と戦い、それを追放したり退治したりすることで、病人の病気を治す「呪医」であり、「悪霊祓い師」なのです。

こうした悪霊と戦う宗教者という側面に目を向けると、密教系の験者や修験者、陰陽道の陰陽師などがクローズアップされてくることになります。ポンナップでは、悪霊は「ホーマ」といいますが、日本では「鬼」とか「天狗」「狐」といった存在が悪霊の代表と考えられていました。たとえば、能の『葵の上』では、「照日の巫女」という巫女が葵の上に乗り移っている六条の御息所の怨霊を呼び出し、祓い落とそうとしますが、果たせなかったために、比叡山の「横川の僧都」を招いて祈ってもらうことで、ようやく撃退しています。この例からもわかるように、巫女は神がかかる霊媒ではあっても、悪霊と戦うという点では験者に劣ると考えられていたわけで、ある程度の分業化が双方の間でなされていたことがわかります。

悪霊退治譚という点、退治される悪霊の方が有名であり、また退治する側では武将の名前の方が知られています。じつは、悪霊と戦い、撃退したという点では宗教者の方が圧倒的に多くの事例をもっています。日本人は病気になると悪霊のせいだと考え、その治療（悪霊祓い）を武士ではなく、宗教者に依頼してきたからです。日常生活のなかのヒーローは「悪霊祓い師」だったのです。しかし、悪霊祓い師は、悪霊祓いがあまりにありふれたことであつたがために、貴族や民衆の関心が悪霊祓い師自身の崇拜よりも彼らの崇拜する神仏の崇拜に向かったために、そして彼らの呪力を畏怖しそれゆえに遠ざけて「異人」視したために、これまで脚光を浴びることが少なかったといえます。悪霊祓い師は悪霊祓いが成功すればたいへん尊敬され報

酬も多かったのですが、失敗すれば「見苦しきもの」として嘲笑され、詐欺師のように扱われたのです。たとえば、陰陽道の安倍晴明は、お伽草子『鉄輪』で鬼となった宇治の橋姫を呪力で撃退していますので、悪霊祓い師としてみなすことができますし、やはり陰陽師の安倍泰成は玉藻の前という美女に化けた鳥羽院に近づいた妖怪狐を祓い落としています。曹洞宗の祐天上人は累とか助といった怨霊を祓い落とした悪霊祓い師として江戸時代の一時期たいへん有名になりました。このように、悪霊祓い師として活躍した宗教者は、安倍晴明を始めとしてたくさんの名を挙げるすることができます。

六 憑霊型シャーマニズムと脱魂型シャーマニズムの比較

ところで、日本の悪霊祓い師とポンナップの呪医（ホウヨンゴル）の病氣治療の方法を比較してみますと、これまでの話ですでに気づかれた方もあると思いますが、大きな違いが認められます。それは、日本では病氣は悪霊が病人の肉体に乗り移り死ぬまで病人を責め続けると考えられているのに対して、ポンナップでは病氣は悪霊に魂を奪われることで生じ、奪われた魂を奪い返すことができなければ、病人がやがて死んでしまうと考えられていることです。ここから、日本の病氣観は憑霊型シャーマニズムに対応し、ポンナップのそれは脱魂型シャーマニズムに対応するということになるのですが、私はポンナップのシャーマンが憑霊現象を示すということに着目することで、日本にも脱魂的なコスモロジーに対応するような観念も存在するのではないかと推測しています。こうした説はこれまでも、何人かの研究者によって指摘されており、その典型的な例として、しばしば日蔵（道賢）上人の地獄巡りや甲賀三郎の地下世界巡りが挙げられてきました。もっとも、私の考えは先学の考えとは少し違っています。といいますのは、先学の考えでは、日蔵や

甲賀三郎に異界へ飛翔するシャーマンの投影を見いだしているのですが、私の場合は、日本の悪霊祓い師が、悪霊と直接戦うのではなく、彼らの分身ともいえる、密教系の僧や山伏の場合は「護法」、陰陽師の場合は「式神」と呼ばれる「守護」使役霊を用いて、悪霊を撃退している点に注目しています。いいかえれば、護法や式神は脱魂した悪霊祓い師の魂の形象とみなせるのです。そしてこの「守護」使役霊が自由自在に飛び回るのです。悪霊祓い師自身は飛び回らないのですが、その分身が飛び回っているのです。

ここで、その典型的な事例を紹介してみたいと思います。すでに私の『悪霊論』で紹介・検討した事例ですが、鎌倉時代に製作された絵巻に『是害房絵巻』というのがあります。中国からは害房という天狗がやって来て、日本の天狗たちに、日本の高僧を痛めつけて見せる、と宣言し、危害を加えようと比叡山の高僧を待ちぶせするが、比叡山の高僧に仕える護法童子たちに撃退されてしまう、という内容の話です。『信貴山縁起絵巻』に描かれた「剣の護法」という護法童子も、信貴山の命蓮の命令で天を駆けて宮中に赴き、天皇の病気を治しています。絵巻には、悪霊の姿は描かれていませんし、詞書にも悪霊を指す言葉は見いだせませんが、剣の護法も悪霊と戦って勝利したのです。

もう少し飛躍した話をしましょう。脱魂型のシャーマンは悪霊に奪われた病人の魂を奪い返すために、さまざまな苦難を克服して、遠い異界へ、地下世界や地の果てまで飛んでいき、悪霊と戦い、それに勝利して、病人の魂を奪い返して帰還します。帰還したシャーマンは、つまり病気を治したシャーマンは、病人の家族や一族、彼らが属する集団から英雄として迎えられることになります。シャーマニズム研究で知られるM・エリアーデは、こうしたシャーマンの象徴的な旅としての冒険・遍歴の物語から、シャーマニズム的な匂いが薄れて語り伝えられることで英雄の物語が生まれてきたのだと主張しました。とするならば、私たちは、

その逆の、英雄の物語、悪霊や妖怪、化け物などに奪われた人間を取り戻すために、悪霊の住家まで出かけ、悪霊と戦ってこれを退治する英雄の物語の祖型を、シャーマンの象徴的な旅に求めてみることも可能なはずです。もっとも、日本の場合は、シャーマン自身がそうした旅をするわけではなく、また悪霊祓い師自身がそうした旅をするわけでもなく、その分身である「守護使役霊」がそうした旅をすることになるでしょう。

七 悪霊祓いとしての「大江山の酒吞童子」の物語

ようやく、この講演のキーワードのひとつである、「鬼」の物語を紹介することができるところまで来ました。その物語とは、私がしばしば引用するので、皆さんもよくご存じの「大江山の酒吞童子」の話です。この物語は伝本がとても多いのですが、もっとも古いと考えられている逸翁美術館蔵の『大江山絵詞』によりながら、物語の展開を見てみますと、脱魂型シャーマニズムの構造を兼ね備えていることがよくわかるでしょう。

京の町で次々に貴族の姫や子供が行方不明になります。いわゆる「神隠し」にあったわけです。そこで陰陽師の安倍晴明が帝に呼ばれて原因を占ったところ、都の北西の大江山に住む酒吞童子という鬼を首領とする鬼の一団がさらっていったことが判明する。もし帝が安倍晴明に彼らの退治を命じたならば、晴明は「式神」を大江山に派遣したはずですが、物語はそのように展開しないのですが、物語のなかで、酒吞童子が語る言葉として「近頃は都の警護が厳しく人をさらうことができない。安倍晴明という悪者か式神を使って都を守っているためだ」と語らせていることから、そうした展開を推測することができます。鬼たちは安倍晴明の式神を恐れているのです。きっと都に侵入しようとして式神に撃退されたのでしょう。式神に代わって

派遣されたのが、源頼光を筆頭とする武将たちでした。彼らは鬼にさらわれた者たちを捜しだし、悪霊を退治して、帰還します。都の人たちは、彼らを英雄として迎えます。

この物語はたしかに武将の鬼退治譚であり、英雄の異界訪問譚なのですが、これまでの検討を踏まえれば、源頼光たちは、安倍晴明の式神の位置を占めていることがわかると思います。つまり、悪霊祓い師の「守護使役霊」の構造的変換形が「源頼光たち」なのです。私は、こうした構造の類似から、この物語が脱魂型シャーマニズムの痕跡を見いだせると主張するつもりはありません。そうではなく、この物語の祖型として、おそらく「守護使役霊」を用いての悪霊祓いの儀礼があるのではないかと推定するだけです。じつは、『悪霊論』で明らかにしたように、『是害房絵巻』の物語も、悪霊祓いの儀礼から生まれた物語でした。『玉藻前』もそうでした。日本の悪霊退治の物語の成立・発生の背後には、悪霊祓いの儀礼があるという想定で臨んだほうが分かりやすいように思われます。『大江山絵詞』では目立たない役割しか演じていないのですが、安倍晴明が占めている位置はとても重要に思うのです。彼の分身である「式神」のそのまた分身が「源頼光たち」なのです。物語は源頼光たちの部分を肥大させ、晴明の役割を縮小したのです。いいかえれば宗教儀礼と悪霊譚の枠を越えて文学へと成長していったわけです。歴史家に高橋昌明さんという方がおられますが、彼は武士もまた悪霊祓いをその主要な仕事としていたことを明らかにしています。宗教者から武士へというプロセスをたどってみたい、あるいは宗教者と武士の協力による悪霊退治にも注目してみることが、これまでとは違った世界が拓けてくるような気がします。

安倍晴明は人間に化した狐と人間の男との間に生まれたという伝説が伝えられています。源頼光は雷公を想起させる名前ですし、その四天王の一人坂田金時（金太郎）は山姥と竜の間に生まれたともいわれています。

す。日本の「ヤニューヤラマ」といっていいでしょう。ポンナップの「ヤニューヤラマ」の伝承や「ホウ
ヨーンゴル」をめぐる伝承は素朴ではありますが、日本の悪霊祓いや悪霊（妖怪）退治の伝承の特徴や構造
を考える手がかりにもなることがおわかりいただけたのではないのでしょうか。

最近のシャーマニズム研究が袋小路に入ってしまったってつまらなくなっているといわれていますが、ここで
述べたような方向からの研究、つまり悪霊退治の物語と悪霊祓いの儀礼の相互関係の研究から、そうした状
況を打破する道が拓かれるのではないかと私は考えております。悪霊祓いの儀礼とは、物語の生成の儀礼な
のです。

まとまりのない話になってしまいましたが、これで私の講演を終わることにします。ご静聴ありがとうございました。

（本稿は、駒沢大学で一九九一年十一月十三日に行った駒沢大学文化学教室主催講演会での講演の録音テープを起こ
したものに、加筆・修正を加えたものである）。